転生！　恋姫

ユークリッド・ヘルサイズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
転生！　恋姫

【Ｎコード】
Ｎ０５８４Ｍ

【作者名】
ユークリッド・ヘルサイズ

【あらすじ】
大学生の主人公、藤堂　仁。ふとした拍子に死んでしまうが・・・・・
たぶん主人公は最強系です。嫌な人は戻ってください。
真・恋姫無双にあわせますがいろいろ変わっていくので不快に思われる方も戻られて結構です。

プロローグ（前書き）

駄文です。
原作ブレイクしていきます。
そんなのでもよかったら見ていってください。

プロローグ

「は～疲れた～～～」
俺は鞄を投げ捨て、ベッドに横たわる。
俺は藤堂　仁。ただの大学3年生、歴史オタクと言われ、三国志が好きな平凡な男だ。
・・・誰に説明してるんだろうね・・・・俺は・・
一人暮らしを始めてからというもの、独り言が増えた・・
俺は自炊が出来るがめんどくさいので、今日もコンビニだ。
夕焼けがよく見えるこの交差点・・・・

「ん？」

小学生ぐらいの子供が横断歩道を渡ろうとしていた。
しかも信号が赤の・・・・・

「危ない！！！！」

とっさに俺は走った！そして子供を突き飛ばした。
はぁ・・・良かった・・・・
しかし車は・・・・・・

キキーーーードン！！！！！！

俺・・・・・・死ぬのか・・・・・
心地よい眠気に身を任せ俺は眠った・・・・・

プロローグ（後書き）

私は後悔していません、反省もしていません。
誤字、脱字等があれば言ってください。
感想よろしくお願いします。

神？参上！（前書き）

やっと神と会いました。
長い目で見てやってください。

神？参上！

その時、いきなり視界が開け白い空間に寝そべっていた
俺・・・死んだんだよな・・・・・
俺はその白い空間の中で動転しそうになった。

「こんな世界俺は望んじゃいない！！！！！」

すみません動転しています。

「騒ぐな！！！」
といきなり後ろから声が聞こえ、振り向いてみるとそこには・・・・・

（子ども・・・・・・？）

そこにはいわゆる・・・美少女が立っていた・・・

「お前か・・・子供を助けたというのは・・・・」

「すみません・・・ここがどこか教えてほしいんですが・・・」

「なら私の質問に答えろ。子供を助けたというのはお前か！！」

いきなり子供に怒鳴られ、恐る恐る答える・・・

「車にひかれる前というのならば僕ですけど・・・」

なぜ、俺は子供相手に敬語を使ってるんだ！？

「そうか・・・・、すまなかった!!」

全然ついていけない俺・・・なんなんだ・・いったい・・・・

「少し状況を説明してもらってもいいですか?」

「そうだな・・・私の名はオーディンだ。結論から言おう、・・・・お前は死んでいる」

やっぱ俺死んでたのか・・・・でも確かオーディンって神の名前じゃあなかったっけ・・・?

「普通死んだ魂は輪廻の輪の中に送られるのだが、・・・・私がこの空間に呼び寄せたのだ」

「どうしてですか・・・・?」

「うむ・・・・それはな・・・・お前の助けた子供というのが現世のお前の世界に遊びに行っていた、私の息子のロキなのだ・・・・神とはいえど現世に降りるには人間にならなくてはいけなくてな・・・・お前がいなければロキは死んでいただろう・・・・すまなかった」

「はぁ・・・・」

「今回の件は、私たち神の責任だ・・・・お前の世界に戻すことはできないが・・・・異世界に転生してやりたいと思う・・・・」

へぇ・・・・まぁいっか!両親と会えないのは残念だけど・・・・また生きれるのなら・・・・・

「それで・・・だ。転生する前にお前の要望で能力などをつけようと思う・・・」

「そんな事が出来るんですか！！」

「ああ・・・私の息子を助けてくれた礼だ・・しかし一つだけだぞ」

「ならその世界に行く時、僕の身体能力を世界最強にしてください！！」

「ああ・・・わかった。いいだろう・・・・ならば・・・いくぞ！！」

俺の前に注がれる光・・・・その光に意識を奪われていった・・・・・

サイド？？？

ここはある村

「お～い。周さんとこがおめでただって～」

「本当かい！あそこの夫婦さんがね～」

同じ村の中・・・・

「おお！生まれたか！水仙！」

「ええ、元気な男の子が生まれましたよ・・」

「よし！この子の名前は周倉にしよう！」

「倉ですか・・・。いい名ですね」

こうして俺は転生し、また生まれたのだった。
そして外史が始まる・・・・・

神？参上！（後書き）

誤字の報告、感想ありがとうございます。
この場で感謝を

そして生まれる・・（前書き）

一話目です。
応援よろしく

そして生まれる・・

まあ、そんなこんやがあり、今俺は一才で木で作られたゆりかごの中にいる。

俺の両親は俺の世話を終え、部屋の外に出て行ってしまった・・・

（何の世界か知らないが俺が周倉の名をもらえるとは…）

とにかく生まれたときにそんな名をもらえたことに驚いて、声を失ってしまった。

我が子を見て、俺が声を出さないから心配そうな顔をしていた両親の顔が浮かぶ・・・・

しかし明らかに中国っぽいし、まさかこれは・・・・三国志！！！

「あぅあぅあぅ～～～～～～～」

俺があこがれの三国志の世界に来られたと思い喜びの余り、歌を歌っていると・・・

（なぜそんなにテンションが高いの・・・・・）

どこからともなく、声が聞こえた・・・・・

「あぅ！！！」

（そんなにびっくりする事でもなかろう・・・私だオーディンだ。聞こえるか？）

「あぅ！あぅあぅあぅ～～」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

（頭で考えれば、伝わる・・・・）

先に言ってください・・・・かなり恥ずかしかったのですよ・・・・

（知らん。そんなこと）

思考が読まれた！？やつはニュータイプか！！！

（いや、普通に神様だが・・・・）

はっ！・・・・そうか頭で考えれば伝わるのか・・・

神様はなんでここに・・・・？

（まぁ・・・・あなたたちの言葉でいう「アフターサービス」というやつだ。・・・・あと私のことはオーディンでいい・・・・敬語もいい・・・）

ああ、わかった・・・・それでさっそく聞きたいのだが・・・ここはどういう世界なんだ？なんか俺の考えだと三国志によく似た世界だと思っているのだが・・・・

（そうだな・・・・たぶん三国志の世界によく似た世界だろうな・・・
）

本気で！！ほんきと書いて本気なんですか！！！？

（あ、ああ、今さっきも言ったがなんでハイテンションなんだ・・・

？）

い、いえなんでもないです。・・・・これ以上言ったら話がややこしくなりそうだからやめとく。

（そうか・・・・ああ、言っとくがお前の願いはかなえたからな・・・身体能力は現在の最強の2倍程度にはなっているはずだ）

そうか・・・ありがとうオーディン

（わ、私はロキのことがあったから、叶えただけだ！か、勘違いするなよ！）

わーツンデレですね、分かります。でも、オーディン・・・

（な、何だ）

この世界にも神はいるはずだよな・・・そこら辺はどうなんだ？

（大丈夫だ。ここは私の持ち場だからな）

そうか・・・もう一ついいか？

（ああ）

この能力で今最強のやつとか倒せるのか？

（無理だ。それはあくまで身体能力最強だからな。技術も持っているやつには勝てん・・・）

そうか。ありがとう。

（それじゃあ、伝えることは伝えたからな・・・）

じゃあまた・・・・・

そしてオーディンは去って行った。声だけどね・・・・・

（これからどうするか・・・・）

俺はそのまま天井を見上げ、考えに耽って行った

そして生まれる・・（後書き）

感想、誤字などがあればよろしくお願いします。

心の強さ・・・（前書き）

え～少しシリアスになり、・・・コメディが書きたいと思いました。
長い目で見てやってください

心の強さ・・

さて生い立ちがあまり長くてもしょうがないでしょう。サクサク行きます。

・・・・え？誰かって？私ですよ私、藤堂　仁・・・もとい周倉です。なんか前より口調が変わってる？
そうですか？・・・・ああ！確かにそうですよね・・・あれからすくすく育っていった私は、幼少期に突然、母に

「話し方に問題があるので矯正しましょう」

と言われ、事あるごとに注意され、地獄のような特訓の末に・・・・・・・・いつのまにかこんな話し方になってしまいました・・
まぁ、別にいやではないですけどね。

まぁ話を戻しましょう。私は幼名の凛花を授かり、幼少期、神童と呼ばれ、騒がれていました・・・そりゃあ中身は２０年以上生きたおっさんですからね。数学とかはかなり簡単でしたし、難しかったのは、漢語でしたね・・

幸いというかなんというか両親はいいところの出だったそうなので、兵法などを教えてもらいました。
兵法は結構学んでいたのでそれなりに理解はできました。・・・・
そういえば幼名で刹那と預かりました
まあ、あの名前でもう呼んでもらえないのか、って思うとさびしいけど・・・今があるから・・・

成長してきて、いろいろ見聞きした結果・・・やっぱりここは三国

志の世界のようです。
だけど、どちらかというと普通の三国志というより・・・・この前友人から勧めてもらってやった恋姫無双のようです・・・だってこの前、隣の家で曹洪っていう子がいたんだからねぇ・・・・・女の子だったし

青年期という時期に差し掛かりそろそろ旅に出ようかなと思っていたが、山賊の被害が増えてきた、ということ村にとどまっていた・・・

そして最寄りの町までいって帰ってきたとき、それは起こっていた・・・

「はっはっはーーーーー!!お前ら!!食糧を奪っていくぞーーーーー!!」

「うわぁぁ〜〜」

「きゃぁぁ〜〜」

燃えていたのです・・・・村が・・・・家が・・・・、死んでいたのです・・・・みんなが・・・・・

ぶつん、と私の中の何かが切れた音がした・・・・

「うぁぁぁぁぁぁぁっぁあっぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっぁぁぁ!!!!!!!!!!!!」

「なんだぁ～～お！」

（なんだぁ。こんなやつ見たことねぇ・・・こんな上玉見たことねぇ！！こいつをさらって帰れば・・・・・・ひひひひひひ）

山賊は剣の柄の部分で、私を殴ろうとしてきたが、私はその剣を奪い取りその件でその山賊を刺した・・・・

それ以降のは私は覚えていない・・・・・・・・・

我に返るとそこには・・・・・・・・・

「うあああああああぁぁっぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！」

そこには・・・・ゆうに２千は超える山賊の死体・・・・・・

私が殺した・・・・・私が殺した！！！

とそのとき

「あなたは悪いことはしていない・・・・・」

声と共にそこには長い間会っていなかった・・・・オーディンの姿が・・・・・

よごれ・・・・血まみれの私を抱き、

「今は泣きなさい。少しでも強くなれるように・・・・・」

オーディンはわたしを抱きしめ続け。
私は泣き続けた・・・・・

オーディンの胸の中で・・・・死んでしまったみんなと・・・・・
殺してしまった山賊を思い浮かべた・・・・

心が強くなりたかった・・・

オーディンの胸の中で、いつか・・・・・強くなりたいと思った・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・

心の強さ・・・（後書き）

やっと村から出て行くかな・・・・・・
ちょっと早かったかな？

早めに次話を出そうと思います

感想、登録が私の力になります

感想などで
今感謝でいっぱいです
本当にありがとうございます

キャラ設定！（前書き）

ユークリッドというのは私です・・・
見ていってくださいね。

キャラ設定！

ユークリッド（以下ユ）「さぁ、始まります。キャラクター設定の公開です！」
周倉（以下凛）「・・・・・いぇーい」
ユ「なんですか・・・・・凛花さん・・・・元気ないですねぇ」
凛「あたり前でしょう！！あんな終わり方で、終わられたら先が気になるってもんです！！次話いこっかな～、なんて思っている読者を放り投げて、時間稼ぎのキャラ設定ですよ！！これが喜んでいられますか！！！」
ユ「でもさ、でもさ～、読者もいい加減山賊のセリフとかで意味分からないところとかもあったかもしれないし～」
凛「まぁ確かに気になりましたけど～・・・・・・・・」
ユ「そうでしょ！そうでしょ！わかったなら話進めていきましょう！！！」
凛「なんかごまかされた気が・・・・・・・・・」
ユ「じ、じゃあ、これが主人公の能力です！ゆっくりしていってね！」

名　周倉　字　洪稟（こうりん）　真名　凛花（リンファ）
力ＥＸ（呂布に勝てるぐらい）　技巧Ｃ（顔良がＢ、華雄がＢ＋）
知略Ｓ（諸葛亮と同じ）　統率力Ｓ（関羽の上ぐらい）
気力Ｓ（楽進を優に超えている）　気の扱いＥＸ（説明不要）
外見詳細
絶世の美女・・・・というにふさわしく、胸以外は完璧（男としては知らないが・・・）

身長は１８０ｃｍ。どこからみても女にしか見えない・・・・・今現在は、旅人の服みたいなのにフードをつけたものを身にまっとっている・・・

ユ「とまぁ、こんな感じです・・・・・・あら？なんでふるえてらっしゃるんです？」

凛「ふざけるなーーーーーーーー！！！！！！！！！！！」

ユ「え？なにが！なんなんですか！？落ち着いて！凛花さん！」

凛「これが落ち着いていられるかーーーーー！！！！チート設定はまだ許せるとして、なんだこの『絶世の美女というにふさわしい』、ってなんだーーーーー！！！だから山賊さんあんなこと言ってたのかーーーー！！！」

ユ「ま、まぁまぁ落ち着いて・・・・・」

凛「こんな・・・・こんな・・・・・ことってあるかーーーーーー！！！私は・・・・・・わたしは・・・・・・」

ユ「なんかいやな予感・・・・・・・・・」

凛「この幻想をぶち壊すっ！！！」

ユ「そのネタやっちゃ、らめぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！！！」

しばらくお待ちください

ピーーー

えーーあの人たちほっといて進めていきたいと思います。

ほかのオリジナルの紹介です。

名　　周広（凛花の父）字　海雲　　真名　光来
名　　周莱（凛花の母）字　紅巾　　真名　水仙

詳細
この二人は、2話間だけの登場となりました。少しさびしいです。
どちらも武将で名はあったんですが、数の暴力に負け死んでしまいました・・・・

次です

名　　曹洪　　字　子廉　　真名　涼清

詳細
真名が少し男っぽいのを気にしていたようです。
曹操の幼馴染だったが親が死んでしまったので移動していたようです。
山賊が来た日は、とある理由で村を離れていて、死んでいません。

まぁこんな感じだよ☆
じゃあまた！応援よろしく～～～～！
ロキでした～～～！

その頃・・・・・・・・・・

凛「俺のこの手が真っ赤に燃えるぅぅぅぅぅぅぅぅ！！！！！！」

ユ「もうやめてぇぇっぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！」

この戦いは朝まで続いたのでした。

ちゃんちゃん♪

キャラ設定！（後書き）

まぁこんな感じで次回に続きます・・・・
曹洪を出す日は来るのでしょうか・・・・・・・・・・・・・・・

曹洪「出してよ！！！」

まぁまぁ次からは後書きで出してあげるから・・・・

曹洪「ん～～～～わかったよ～～～～、じゃ次からよろしく！」

次からは後書きも長くなりそうです・・・・・・
感想ありがとうございます。
感謝を噛み締めて書いていきたいと思います。

過去を超えて（前書き）

えーーー作者はあまり三国志を詳しくありませんのであしからず
作者の言い訳でした
それじゃあゆっくりしていってね！

過去を超えて

「よしっ！」

私は、最後のお墓を立て終える・・・・・・・

平和な国で、過ごしてたんだなぁ、っとしみじみ思った。

人を殺めてしまった・・・・みんなを守れなかった・・・・・・その事実は変わらない・・・・・でも、これだけはしておきたかった・・

「終わったのか？」

「ええ・・」

私はそこにいるオーディンに答える。

そういえばあれからずっといてくれてたんだよなぁ、今さっきのことを思い出すとすごく恥ずかしい・・

穴があったら入りたい・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「良かったのか？わざわざ賊まで墓作って・・・・・」

「ああ。この人たちも村を襲ってきたけど・・・私たちと一緒の人間だからな・・・・・・死んだ時に墓も建ててもらえないなんて・・・・・不憫すぎますから・・・・・」

甘いといわれるかもしれない・・・・偽善といわれるかもしれない・・・・でも、これが私の本心だった・・・・

「優しいんだな。仁は・・・・」

少し顔を赤らめ、オーディンは言った・・・・どうしたんだ？

「ありがとう。オーディン・・・・・付き添ってくれたりもして・・・・」

「か、勘違いするな！貴様が落ち込んでいたら、ロキが悲しむ！」

「それでも・・・・・ありがとう。オーディン。」

「ま、まぁ、・・・・・どういたしまして・・・・・」

そしてオーディンは背をむき、

「私は天界に帰る・・・・またな・・・」

「そうか・・・もういっちゃうんですか・・・・」

「ああ。大丈夫だ。また会える・・」

「わかった。さようなら・・・・オーディン」

そして消えていくように粒子になっていくオーディン・・・・・

それをわたしは見つめ、完全に消えっ去った後、

「さて！これからどうしましょう？やっぱり・・・・・・うん！洛陽辺りまでいってみましょうか！！」

その途中の村々で修業しつつ・・・・・・やっぱり、技術も付けたいし・・・・
そんなことを考えつつ、村を出たのだった・・・・・・・・

サイド？？？

「華琳様！やはりこの先には賊の気配がありません！」

「なぜ？・・・どういうこと？」

村が賊に襲われている・・・・・その報告を受け、ここまでやってきたのだが・・・・
その村に入ると、もう村は全壊していて、なぜか賊の死体の山があった・・・・・

「他の軍が来た後なのかしら・・・・・？」

「華琳さまぁ～～～～～」

そんなことを考えていると、春蘭がやってきた。

「春蘭・・・ごくろうさま。何かわかった？」

「はい！軍が着た形跡はありませんでした！・・・・あと、見ていたというものがいたので連れてきました！」

「よくやったわ！春蘭！・・・・それでその者は？」

「はい！・・・こちらに！」

「私は、陳留の史師、曹操よ」

「へ、へぇ」

「なにがあったのか？教えてくれないかしら？」

「一人の天女としか思えぬものがいて・・・・そのものが賊を切っていたのです！このあたりの村の者はみんな見ております・・・・」

「その話、興味深いわね・・・」

一人ならともかく、この辺りの者全員が見ているとなると・・・・・

「その者の、特徴を教えてくれるかしら？」

「天女のようで・・・・・・・・そして茶色の服を着ているように見えました・・・・」

「へぇ・・・その者欲しいわね・・・・・・・」

あの数の賊を一人で・・・・・その力必ず私の覇道の力になるわね・・・・・探し出してあげる・・・・・フフ

過去を超えて（後書き）

曹「華琳ちゃんに目をつけられちゃてるよーーーー！」
作「まあ、いいんじゃないですか」
曹「それで、私が出てくるのはいつなんです？」
作「そ、それじゃあこの辺で。バイバイキーン！！」
曹「あっ。逃げた。まてっ！」

次回、お楽しみに！

助けられなかったもの（前書き）

やっと洛陽です。
ここまで長かった・・・・
少し更新がおくれてしまいました
あと、字が？統のとかぶっていたので変更しました
本当にすみませんでした

助けられなかったもの

「ありがとうございました！周倉さん！」

「お礼の言われるようなことはしていません」

私は洛陽に向かいつつ、修行で、賊たちを倒している。
それで私の身体能力について、分かったことがあった・・・・・・
まず筋力や脚力に関しては、こんな人いていいのか・・・・・？と思うほどすごい。
自分より、5倍程度の岩なら普通に壊せるし・・・・・
蹴れば、ギャグマンガで、いじられキャラが殴られた時ぐらい吹っ飛ぶ・・・・・・
まぁ、素で足で蹴ったり、素手で殴ったら痛いですけどね・・・・・

体力は、疲れを知らない体、と言っていいだろう。

回復力は異常に高く、小さい切り傷なら1分ぐらいで治ってしまう・・・・
毒とかは効くんでしょうか…？試したくはないけれど・・・・

五感も発達し、目は異常に良い。
動体視力や反射神経も凄い。
達人の目線ってこんなんだろうな～なんて思うとぞっとする。

まぁ今日も、一つの村を助けて来たところだった。

「えーーっと、地図だとこうだから・・・・・・・あれ？」

前方には、何かが落ちていた・・・・・・・・・・・・・

「あれなんだろう・・・・？少し見に行くか・・」

少しずつ近ずいていく・・・・・・すると私の眼は落ちているものを映し出した。

「ひ、人っ！！！！？？」

倒れている子どもに、あわてて駆け寄っていく私、

「だ、大丈夫ですか！？大丈夫ですか！？」

私がゆすっていても、一向に目を開けない・・・・・・・・・・・・

「くっ！この近くに村か何かないのか！？」

私は、地図を出し、近場の村を探した・・・・・・・・

「ここからじゃあ、洛陽が一番近いか・・・・・・」

私は、全速力で洛陽に向かった・・・・・・

洛陽の門前・・・・

「開けてください！」

「駄目だ！」

そういえば、ここら辺に賊が集まっているって聞いた・・・・・・・・

そのせいかっ！

「人が死にかけているんです！開けてください！」

「・・・・本当？」

「はい！本当です！」

早くしないと・・・・この子がっ・・・・・・・・

暗闇であまり見えないが、隊長らしき人の影が見えた・・・

「・・・・分かった」

「呂布さまっ！こいつが賊の一味かもしれないんですよ！？」

「でも・・・・・・こいつ悪い人じゃない・・・・」

「ですがっ！」

「早く・・・・・門・・・・・開ける・・・・」

「・・・・分かりました」

門があいた。あの子（声を聞いたところではあまり年が変わらない）が開けてくれたのだろう・・・

早く行かないと！、そう思っていると人影が近ずいてきた。

「・・・・こっち」

女の子だった。ボーイッシュな髪形な・・・・・

ってそんなことやってる場合じゃない！

「ありがとうございます！」

街を進んでいくと、一つの小さな家があった。

「これは・・・・・・？」

「・・・・・恋の家・・・・・」

恋!??? 誰なんだろうか？医者の名前かなぁ？

入るとそこは普通の家だった・・・・・大量の動物がいることを除いて・・・・

「・・・そこに寝かして」

「は、はい！」

動物たちの間をまたぎ、ベッドがあるところまで行く・・・・・

やっとベッドにつき倒れていた子を、ベッドに横たわらせる・・・

「・・・座って」

「はい。わかりました」

置いてあった椅子の片方を指さして、女の子は私に言う。

私はその椅子に座った。
そしてフードをとり、言った。

「私の名は、周倉。字は洪稟です。助かりました」

「・・・・恋は、呂布。字・・・・奉先」

やっぱり呂布さんだったか・・・・・・・
ゲームはキャラクターをちらっと見たことあるだけだけど、少しは覚えている。

「じゃあ、すいません。宿泊分などの路銀は置いていきますので、私はこれで・・・・」

「・・・・ダメ」

「え？」

突然腕を掴まれたので少し驚いた。

「・・・・この子が起きるまで、いなきゃダメ・・・・」

「・・・・分かりました」

すごい力で引っ張られてるし・・・・・・・・
そんな上目遣いで見られると・・・・・・・・・

それから数刻・・・・・・

「ううっ・・・・」

「起きた！」

「大丈夫かな？荒野で倒れてたんだよ？」

「・・・・・訳をきかせて」

「ねねの村は、山賊にやられちゃったのです・・・・」

淡々とその少女は、語ってくれた。
自分の村が、山賊に襲われ、なくなってしまったこと・・・・
そして自分は逃げ延びたが、食料もなくあそこで倒れてしまったこと・・・・

「大変だったんですね・・・・・・」

「・・・・・・大変」

「母上・・・・・父上・・・・・・・・・ぐすっ」

こんな少女もいるのだ・・・・・私が助けられなかった村には・・・・・・・・

私は励ましに頭をなでた。
その少女が泣きやんでから・・・・

「君の名前は？」

「陳宮なのです。」

「そういえば、君にはいくところがあるの？」

「ないのです。身寄りもあそこにしかいなかったのです」

「呂布さん。・・・お願いがある」

私はある決心をし、言った。

「・・・・・何？」

「この子をここに住まわせてほしい！路銀なども支払いも持ってくる！だから・・・・」

それが私が救えなかったこの子に対する恩返しだと思ったのだ。

「・・・・べつにいい。・・・・・・・その代り条件がある」

「なんですか？」

「・・・・・たまには帰ってくること」

その提案には驚いた。

「それだけでいいの？」

「・・・・・・・いい」

良かった・・・・・・・・・

とその時、

「なんで・・・・なんで・・・・ねねにそんなことまでしてくれる

のですか？」

「私は、あなたを幸せにしたいと思っただけだよ」

本当にその気持ちだけだった。

「ありがとうなのです・・・・・・・」

「いいよ。・・・・それで呂布さん」

「・・・・・・・何？」

「ありがとう」

私は笑顔で言った。・・・・・あれ？なんで二人とも顔真っ赤なの？

「じゃあ私は、この辺で」

「・・・・・・何で？」

「いや私、勘違いしてるかもしれないけど男だからね・・・・・」

『えええええええええええええええええええええええ』

やっぱり二人とも勘違いしてた・・・・・・

私はそのまま、宿に向かった・・・・・

その後、呂布の家が遅くまで明るかったのは別の話・・・・・・

助けられなかったもの（後書き）

曹「呂布さんたち話し方が違う気がするけど・・・・」

それは言わないでください！お願いします！

曹「まぁ、いいけど」

難しいんですよ・・・・・

曹「それをどうにかするのが、作者の使命なんじゃないの？」

すいません。マジすいません

感想など、お願いいたします・・・・

帰ってくる場所（前書き）

投稿ペースが遅くなってるような気がする・・・・

帰ってくる場所

「ふぅそろそろ行こうか」

荷物をまとめて、宿屋から出る・・・・
私はこれから呂布さんの家にこれからのことと、陳宮のことを話しに行く。
まあ、あの女の子が陳宮だとは思わなかったなぁ・・・・・・・・・・
まぁそんなことを考えているうちに、ついた。
曹操さんにも会ってないんだろうなぁ・・・・・・
少し緊張する・・・・・
こんこん、とノックをし、言う。

「呂布さん、入るよ～」

「・・・・どうぞ」

許可をもらえたので、入りましょうか・・・・・

「おじゃましま～す」

「・・・・・・・周倉」

「周倉殿」

「ん？なに？」

陳宮と呂布さんが少し暗い表情をしながら、私の名前を呼ぶ。

「周倉殿は、言ってしまわれるのですか？」

あっちゃ～いきなりその話しか～～

「あぁ・・・・・・呂布さんと話をしたらね・・・・・」

「そんなの・・・・ダメなのです！ダメなのです！」

涙目で私を見て、訴えてくる陳宮・・・・・

「私も時々は帰ってくるし、呂布さんもいるし心配ないよ」

「ねねも周倉殿についていくのです！ねねはまだ恩返ししていないのです！」

「駄目だ！」

「・・・・・なぜなのですか？ねねのことが嫌いなのですか？」

今にも陳宮は泣きそうだった・・・・・・・

なんでそんな考え方しちゃうかなぁ・・・・・・・・・・・・・・

「私は陳宮には生きててほしいし、嫌いじゃない。ただ私についてくると、陳宮に危険が及ぶ・・・・・・

それが嫌なんだ」

「周倉殿・・・・・・」

「・・・・・・陳宮、諦める」

「なら・・・・・・・」

納得してくれたようだった。でも・・・・少し決意に満ちた目でこちらを見る。

「ねねの真名は音々音なのです。せめて真名で呼んでほしいのです」

「・・・・・・わかった。その名で呼ぶよ」

なんとか説得できたか・・・・・・・

私は呂布さんの方をむく・・・・

「呂布さん・・・・・お金のことだけど・・・・・・」

「・・・・・・別に良い。」

「ええ!?」

なんで!?

「でも・・・・・・」

「・・・・・・・恋も、陳宮助けたい。だからいらない。」

「そうですか・・・・・・でもお金は持ってきます」

それが、私のけじめだから・・・・・

「・・・・・分かった。私の真名、恋」

「いいんですか？私なんかに真名、教えて・・・・・」

「・・・・・いい。周倉強い。雰囲気でわかる。しかも子供を助けた。いい人」

「わかりました。私の真名は、凛花です」

私は笑顔で言った。

私は、助けてもらったのが恋さんでよかったと思っていた、・・・・・だってこんなにいい人そんなにいないんですよ。

それでなんで二人とも顔真っ赤なの？

「それじゃあ、この辺で・・・・・・山賊が来たときは、呂布さん・・・・お願いします」

「・・・・・分かった」

「もう行っちゃうのですか？」

悲しそうに音々音言った。

「うん・・・・・そろそろ出ないと、次の街に行けないからね」

「・・・・・・・・・分かったのです。また来てくださいなのです」

「・・・・・・・・・定期的に帰ってくる。約束」

「分かってるよ。じゃあ」

「ばいばいなのです」

「・・・・・・・ねね違う」

「うん違うね」

私と恋さんは顔を見合わせ笑った。
音々音は戸惑っている。

「え？」

「さよならとかばいばいじゃなくて・・・・また帰ってくるんだから・・・・・・」

「またねでしょ！」

音々音は驚き・・・・やがて嬉しそうに。

「またね！です」

私はここに帰ってくる・・・・・・・・
だってわたしの・・・・・・私の帰りを待っている人がここにいる

から・・・・・・・

帰ってくる場所（後書き）

曹「ねぇ、今度は凛花ちゃんの話し方がおかしいような気がするんだけど」

気のせいですよ気のせい・・・・・

曹「本当にそうなのかな？ちょっと本人呼ぶよ・・・・」

やめてください！勘弁してください！

感想などお願いします・・・・

呉（前書き）

呉に行っちゃいました・・・・・

呉

「はぁ～～～～～・・・・・・・」

私は迷っていた。

「あの時、見栄張らずにちょっと持っていけばよかったかなぁ～～」

私は洛陽で、今の持ち金すべてを呂布さんたちに渡してしまっていたのだった。

呂布さんには

「・・・・・・置いていかなくていい」

と言われたのだが・・・・・・私は、

「約束は破れない」

ときっぱり言って、強引に渡してきたのだった・・・・・・

生活する分のお金なら、すぐ稼げると思ったのだが・・・・・・・・・

この頃の村は、賊を退治しても税率が厳しく、食べていくのがやっとの人たちばかりでお礼をするほどの食料が出来ないのである。

・・・・・・さすがにそんな人達から、食料を巻き上げるのは私の流儀に反するのでやってはいないが・・・・・

ちなみに私のお金は０だ！

威張って言うのも何だが・・・・・・・・

しかも進むにつれて、「女だ！」とか言って追いかけてくる賊もいたりする。

やばい・・・・・・目の前がかすれてきた・・・・・・・・

「もう疲れたよ・・・・・・パトラッシュ・・・・・・・」

あぁ、・・・・・・・私も末期だなぁ・・・・・・・・・
向こうに川が見える・・・・・・・・・・・川！
水をまったく飲んでいなかった、私は一目散にそこへ向かう。
・・・・よかったぁ～～～～・・・・・・・
安心した瞬間、私の意識は遠のいていった・・・・・・・

サイド思春

「ふぅ・・・・・」

重いため息をつかれる蓮花様・・・・
こうして気晴らしに、遠乗りに出掛けてはいるが、表情が晴れることはなさそうだ。
袁術に軟禁され暫くがたった・・・・
袁術への陳情書などを処理する毎日・・・・・
雪蓮様方が反旗を翻すのも近い未来だろう・・・・・・・・

しかし、心労が日に日に大きくなっているのも事実・・・・・・・

馬を走らせ、風を感じる。

これで少しは蓮花様の気分が晴れればいいのだが・・・・・・

「ん・・・？思春・・・・あそこの川に、何かない？」

蓮花様が視線を向ける先には、川の岸に着物？らしきものがあった。

「思春、見に行ってみない？」

「危険です！蓮花様！」

「少し見に行くだけよ」

私の声も聞かず、走っていく蓮花様・・・・・

私もそれについていく・・・・・・

近づいていくと分かった・・・・・あれは人だ。人が倒れている・・・・・・

「あなた、大丈夫！？」

駆け寄ろうとする蓮花様に、

「蓮花様！危険です！お下がりください！」

他人が見たら過保護だともいえる発言だが、御身に何かあったら・・・と思うといわざる負えない。

「思春！でも、放っておけないわ！」

蓮花様は、少女に駆け寄り、倒れている少女に歩み寄る。

「大丈夫。衰弱しているようだけれど、命に別状はないわ」

そういって安堵の表情を浮かべる蓮花様。

しかし危険すぎる。誰かの策略かもしれない・・・・・・という考えが私の頭の中で駆け巡る。

私は疑い深いほうがいい。蓮花様がお優しいから。

「思春、運ぶわ手伝って」

「しかし！」

「一人も救えない人は王になどなれない・・・・・思春、お願い」

毅然と言い放つ蓮花様。

「・・・・・御意」

私が気をつければいい・・・・・・

私はそう思いつつ、少女を馬にくくりつけ、城へ戻った・・・・・・・

呉（後書き）

曹「そういえば作者さんは、次回予告とかしないの？」

しませんよ～そんなめんどくさ・・・・ゲフン、ゲフン面白くないこと～

曹「なんか言いなおさなかった？」

何にも言ってませんが。何か？

曹「まぁ・・・いいか。次回予告しようよぉ」

そんな上目遣いで見ないでください！わかりました！やりますよ。やればいいんでしょう！？

曹「うんうんその意気その意気～」

じゃあどうぞ

次回予告

気づいたら呉の宿舎にいた周倉！
そこで聞かされたのは、彼女たちの無念と彼女たちの願い！
周倉はそこである決心をしたのだった・・・・・

次回　転生！恋姫「決心」

曹「さぁ、運命の鎖を解き放て！」

※この作品の次回作は、作者の都合により大幅に変わるかもしれません
注意してください。

曹「本当にこのあらすじの通りにする気有るの……？」

感想などお願いします

呉の将たち

「ん・・・・ん・・・・・・・」
私は眼をあける・・・・・・・・・・眩しい・・・・・・・

「ここはどこだ・・・・？」

豪華な部屋に私はいた・・・・・・・・・
たしか・・・・・・・・・・湖っぽいところで居たような気がするんだけど・・・・・・・・
ふと、私の前に料理のいいにおいがした・・・・・・・・
机の上には料理が・・・・・・・・・・・・・
私は・・・・・・・・・・食欲に負けてしまったのであった・・・・・・・・

ふぅ、おいしかった。

そういえば私の服と（服は着ているのだが違う服になっている）剣は・・・・・・・？
と頭を悩ませていると・・・・・・・・・

「目を覚ましたようだな」

「は・・・・・・・・・？」

そこには・・・・・・誰だっけ？私は頭の中で恋姫の知識を探ってみる・・・・・・
髪が長いけれど・・・・・・・・・孫権か・・・・・・・・・？

「どうした？」

「い、いえ」

声かけられ、我に返った。

「あの～あなたが助けてくださったんですか？」

「ああ、川に流れ着いていた貴殿を見つけてな」

「ありがとうございます・・・・・あのすみません、あそこにあった料理頂いちゃったんですけど・・・・・・」

「ああ。構わない。貴殿のために作ってもらったものだ。・・・・体調は？」

「はい！大丈夫です。自己紹介遅れました・・・・私の姓は周、名は倉。字は洪凛です」

「あぁ、構わない。私は孫仲謀、そして・・・・・」

「・・・・甘寧だ」

チリーン

と鈴の音が鳴り音もなく扉から出てくる甘寧さん。

うわっ。甘寧さんの存在に気づいてなかったら声に出してたよ・・・・・

「ありがとうございます・・・・・私の装備は・・・・・・？」

「失礼した。剣は預かっている・・・・・・万が一があるのでな。・・・・すまない」

少し申し訳なさそうに言う孫権さん。

「いえ・・・・見ず知らずの私を助けていただいただけでも感謝しています」

頭を下げる私に

「いや、いい。当然のことをしたまでだ」

と踵を返し、部屋から出ていく孫権さん。

やっぱり王になる人の威圧感ってすごいよなぁ。

もう少しだけ休もうかな・・・・・

「おい。貴様」

休ませてください。

やっぱり少しだけ、気配が残ってると思ったら・・・・・

甘寧さんですか・・・・・

「はい？」

「蓮花様に危害を加えるつもりならば・・・・・ここで切る・・・・」

なんでそんな話になっちゃてんの！！！！？？？

「そんなことはないです・・・・」

「そうか・・・・まぁいい。蓮花様に危害を加えてみろ・・・・・・容赦はしないぞ」

そういい、甘寧さんは出ていく・・・・・・・・・

「はぁ～～～～～～～～～・・・・・・」

私は寝台に寝転がりそのまま眠ったのだった。

私は少し早く起きてしまったので、庭のほうで訓練をしていた。

敵の仮想イメージを作り闘っている。いつもなら賊をイメージするのだが・・・・・

いま私は、1対1のイメージを出している。

・・・・・・・しかし上手くできないなぁ。

勝ってしまうのだ・・・・・・やっぱり、イメージでは限界があるなぁ。

やっぱ複数戦のをやっとこうか。

私は剣を取り出し、イメージする。

50にんぐらい想像し倒していく・・・・・・・・

半分ぐらい倒したところで、不意に、

「見事だわ・・・」

「え？」

「ごめんなさい！邪魔しちゃったかしら」

申し訳なさそうに言ってくる。

「いえいえ、・・・・今休憩しようと思っていたところですよ」

私は、孫権さんの隣の石に座る。

「それにしてもすごいわね」

「いえ・・・・まだまだですよ」

「謙遜はしないで」

私が照れているときに、後ろから、

「蓮花様。そろそろ・・・・」

「わかったわ。・・・またね、周倉」

そしてなぜか甘寧さんだけがこちらを向き、

「貴様」

「はい」

「お前か？近隣の村で賊退治をしていたのは・・・・？」

「はい私です」

その時に、『破壊神』とか『勝利を呼ぶ女神』とかいわれてたけど・・・・・・

「そうか。・・・・貴様が『魔王』か・・・・・」

なんか、すごいあだ名ついてるんですけど!?

しかも少し嫌な予感が・・・・・・・・・

「貴様・・・・・・昼頃ここに来い・・・」

やっぱり〜〜〜〜〜〜!!?

「拒否権はないが・・・・・・な?」

「はい!!!」

そして私は孫権さんと試合をすることになったのだった・・・・・・・

呉の将たち（後書き）

曹「今回も次回予告しようよ～～～」

嫌です。あんな通りになりません

曹「嘘予告楽しいじゃない～～～」

だめです！曹洪さんは黙っていてください！

感想お願いします・・・・

別れ（前書き）

すいませんでしたっ
本当にすいませんでしたっ
この一言しか言えません。
まずは更新がこんなに遅れてすいませんでしたっ

次はご指摘のことですが、「俺ｏｕｔ現実?俺ｉｎ異世界」読ませていただきました
凄く似ており、驚きました。私もこの後はこのような展開にしようと思っていたので、いけないと思い書きためていたものを書き直しました。
本当にすいませんでしたっ
そしてご指摘ありがとうございましたっ

別れ

夜・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「やぁぁぁ！！！たぁ！」

闇夜の中、私はまた訓練をしていた・・・・・・・・・・
私がなぜこんなことをしているかというと・・・・・・・・・・昼に遡る・・・・・・・

私は、甘寧さんの依頼（脅迫）どうり庭に来た。
すると・・・・・・・・・・まだ私以外誰もいなかった。

「おかしいなぁ・・・・・」

私は約束したはずだし、甘寧さんとは今日会ったばかりだが・・・・・・・・約束を破る人とも思えないし、時間に遅れるとも思えないのだが・・・・・・・

「なんか急用でも入ったのかなぁ・・・・・・・」

私としてもそっちのほうがありがたいのだが・・・・・・・・・・・・

「ふ、ちゃんと来たか・・・・・・」

ですよねーーーーー！　都合のいいほうに考えちゃいけないんですよね！

後ろを向くと甘寧さんと孫権さんがいた・・・・・・

「ああ！約束の人って周倉だったのね」

「そうです・・・・・少し腕を見てみたいと思いまして」

本当に腕を見るだけなんですか！？と聞きたくなった・・・・・・

「それでは・・・・・行くぞ周倉」

「は、はい」

甘寧さんに言われ、中央の所に行く私。
持ってきていた剣を構える。

勝てるかな～・・・・・・だめかも・・・・

「ならば・・・・・いくぞ」

シュンっと私の横で剣の音がする。
いきなりですか！とっさに避けたからいいものを！
私は左に避け、体勢を立て直すとさらに４、５撃。

やべーーー強い。
何とか今まで避けきれているけど・・・・・・・
少し本気を出すしかないのかな・・・・・・・・

サイド思春

私の本気を、この6撃にこめたのだが・・・・・・・・・・
やはり強い・・・・・・・・・・魔王などと呼ばれるだけはある。
だが・・・・・・・攻撃がない。魔王などと名前を付けられるのだから攻撃的だと思っていたのだが・・・・・・・私の思い違いだったか・・・・・・・

周倉は、いきなり動きを止め、力を抜いたような状態になった・・・・・

誘いか？しかしあの状態から私の一撃を見切れるほど、甘くはない。
私は首をめがけて渾身の一撃を打った。

その瞬間だった・・・・・・・周倉の顔が消え、後頭部に強烈な衝撃が来たのは・・・・・・・・

サイドアウト

そうあの時私は、奥の手を使ったのだった・・・・・・
瞬歩を使い、後ろへ回ったのだった。
あれからが大変だった。孫権さんには「我が軍に入らないか」と誘われるし、甘寧さんには「その技を教えてくれ」とか言われるし・・・・・・・・
孫権さんのは丁重にお断りし、甘寧さんのは逃げた・・・・・・・・
そして、あまり長い間居てもしょうがないので、明日の朝出ることも伝えておいた。
どちらも残念そうな顔をしていたが・・・・・・・

そして、私はと言えば、次は奥の手が使わなくても勝てるように訓練をしている。
あれは、反則的な技だし・・・・・・足腰に負担がかかりすぎるのだ。
あまり使わないほうがいい。

「これでおしまいっと・・・・・」

終わろうと、動きを止めた瞬間だった。

ガサッ!!

「誰だっ!!!」

俺はその音がした方向に剣を構えた。
その草むらから出てきたのは、犬だった。
・・・ただの犬ではなかったが。
大きな・・・・・そんな生易しいものではないか・・・・・
巨大なそれこそ、フラン〇ースの犬か・・・・・と思うほど大きかった。
それを見て私は

「かわいい・・・・・・お、お、おっ持ち帰り〜〜〜〜〜〜〜」

すっかり心を奪われていた。もともとスヌーピー類が好きな私にはピンポイントだった。
私はその犬をお持ち帰りし、一緒に寝たのであった・・・・・・・

朝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ほんとに言っちゃうのね・・・・・」

「ええ。決めたことですから・・・・・」

孫権さんは終始別れを惜しむ・・・・・・甘寧さんは無言でこちらを睨みつけている・・・・・・
怖い・・・・・・・・

「それでは・・・・」

「ええ・・・・・じゃあ」

「甘寧さんも・・・お元気で」

「ああ・・・・・」

良かった。答えてくれた。

私は、犬を連れ洛陽へ向かう・・・・・

なぜか？この犬を見ていたら、音々音を思い出したからだ。

私は帰る・・・・・私の居場所へと・・・・・・・

別れ（後書き）

曹洪さんの都合により、今回の後書きは休止させていただきます。

董卓軍（前書き）

遅れてしまいました！すいません！
それではどうぞ！

董卓軍

帰ってきました！洛陽！！
よし～音々音のところに行くか～・・・

「いえ、周倉が来た・・・・とでも言ってもらえれば・・・・・・・」

「今、ここにはいらっしゃらない！」

「じゃあ、どこに・・・・・？」

「今はたぶん、城ではないか？」

不意に、通りかかった兵士さん（兵士Ｂとする）が言った。

「そうですか！ありがとうございます！！」

私は兵士Ｂさんから聞いたことを頼りに城に向かった・・・・・・・・・・・

「お、おい！」

「あいつ大丈夫か・・・・・？」

「今、会議をしているのではなかったか・・・・・？入れないだろ・・・・」

やっとついた・・・・・あれかな？入口で会話している兵士さんに話しかける。

「ここに、呂布さんいますか？」

「なにかようか？」

「合わせていただけませんか？」

「ん～今は無理だな・・・・・まだ会議をしていらっしゃる・・・・・」

「そうですか・・・・・・・・」

じゃあここで待っておこうかな？

「呂布将軍の客人ならば、私が案内するから部屋の前で待っておられては？」

「お願いします！」

兵士さんに案内してもらいながら、ここが董卓さんのお城ということ、音々音がこの軍に入ったということ・・・・・・・・などを聞いた。

世間話をしている途中に会議が終わった。

「終わりましたよ？」

出てくる人たちから呂布さんたちを見つけた。

「ただいま、恋さん、音々音」

「・・・・・・おかえり」

「おかえりなのです！」

私を見るなり、音々音が勢いをつけて飛び込んできた。

「うわっ」

「周倉殿！遅いのです！1か月で帰ってくるといったのではありませんか！！」

「ごめんごめん、音々音・・」

そういって頭をなでて、謝る。

「周、周倉殿！？・・・・」

赤くなり黙ってしまった・・・・・・なんで？

「・・・・・・おそかった。心配してた。罰、恋と勝負する。」

「え！？」

私が嫌だなぁ、って言っていると、恋さんの後ろにいる人たちが驚いていた。

「後ろの皆さんどうしたんですか？」

「いやぁ、・・・・・だって・・・・・ねぇ？」

まず眼鏡をかけた子があいまいな雰囲気で言った。

「あんた、恋と戦ったときあんの？」

と関西弁の女の子が聞いてくる。

「・・・・・・みんなも見る？」

「おう！みるで！見るで！」

「確かに、見てみたい気がするわね・・・・・月も呼んでくるわ」

「あの～私やるとは・・・・・」

「・・・・・だめ」

「そうですか・・・・・・」

私はため息をつき、皆さんについていった。

董卓軍（後書き）

どうでしたか？
やっぱり、董卓軍の人たち難しいです・・・・・・
え？曹洪はって？出番がもうすぐなので、準備に入ってますよ・・・・・たぶん。話は変わりますが、お気に入り１５０突破！ありがとうございます。引き続きこんな小説で良いのなら、応援してやってください。
それでは。

呂布との訓練（前書き）

すみません一つだけ言わせてください。
この作品を見て不快になった人がいるのなら謝ります。
しかし、いちいち感想に、『ゴミ作品』などと書くのは、指摘ではありません。確かに駄文ですし、直さなければならないところはたくさんあるでしょう。
だからといって、ただの悪口ならば、そんなにこの作品が不快ならば、この作品を見ないだけで済むのではないでしょうか？
・・・・・すみません。長々と偉そうに書いてしまいました・・・・・

では、本文です。どうぞ！

呂布との訓練

「・・・・・・ここ」

「ここが、練兵場や。」

みなさんについていくと、練兵場という場所に連れてこられた。

・・・・・・・・ここでするのかな・・・・？はぁ・・・・・・・・・

「・・・・早く、凛花」

「うん・・・・・・」

やっぱり勝負しないといけないよな・・・・・・・・・まあじゃあ武器もたないと。

私は剣を出した。

「じゃあ、ええな？」

「ああ・・・・・」

「・・・・・（こくっ）」

「始めっ！！！！！」

正面からいきなり、方天画戟が振り下ろされた。

うわっ・・・・あ、あぶねぇ・・・・・・・・

そして避けたと思ったら、横からも一撃。

マジですか！ちょっと、凛花さんはこんな速い攻撃・・・・・・・っていうか！完全に殺しにかかってきてませんかねぇ！！

そんなことを思っているとさらに下から。

うわぁ！！ちょっと待って・・・・・・・・・まさか・・・・・・・・・

恋さん。怒ってますか？・・・・・・・

うん・・・・・・・怒ってるよ！！これ！！

そう思いつつ私は、恋さんの攻撃を避けた。

ちょっとこのままだとまずい・・・・・・・・よしじゃあ本気でやるか。

「はぁぁぁ

「やっぱ、恋の相手になる奴っておらんのかぁ」

そう思っている矢先だった。いきなり数秒だけだが、凛花と呼ばれる少女が動きを止めたのだ。

（あほか！今の恋は本気やし、死んでまうぞ！！）

その時だった。

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！」

と叫び、凛花と呼ばれる、少女のほうが反撃し始めたのだ。

それは、もう乱舞だった。

魅せられるほどの・・・・・・・・舞だった。

すごかったが、恋も負けてはいない。

どちらも互角程度。

思わず

「すごい・・・・・・・・・」

と呟いてしまうほどだった。

そしていまここにいない兵たちに、

「もったいないなぁ」

とつぶやいたのだった。

サイドアウト

「はぁはぁはぁ・・・・・・」

試合は終わった。あそこから決着はつかず、恋さんが中断するまで続いた。

董卓さんから、

「ここに泊って行ってください」

といわれそのことばにあまえているのだが・・・・・・・

今、華雄さんから追われている。

理由は、

「戦え!」

ということであった・・・・・・・

はぁ・・・・・・・不幸だ・・・・・・・

その鬼ごっこは、深夜まで続いたのだった・・・・・・・

呂布との訓練（後書き）

戦闘描写・・・・・・下手です。何でこんなに戦闘描写が書けないんだろう・・・

ＰＶ１０万突破！！ユニーク１万５千突破！みなさん、見ていただきありがとうございます！！

皆さんが応援していただいていることをかみしめながらがんばります！！！！

それでは！

陳宮の親友（前書き）

少し遅くなりました
どうぞっ

陳宮の親友

「おはよ～恋さん、音々音」

「おはようです」

「・・・・・おはよう」

あれから鬼ごっこから解放され、次の朝。

・・・・・・・はぁ、死ぬかと思った・・・・・

「・・・・・・・大変」

「だ、大丈夫なのですか？周倉殿」

「うん大丈夫。」

そして食事をしている音々音を見る。

ああ～なごむなぁ・・・・・・・・・・・・・・ん～なんか忘れてるような・・・・・・・・・・・・・・

ああ！そうだ！

「・・・・・・・凛花？」

「周倉殿！？」

私は立ち上がり、恋さんの家に行った。

そうだ、パトラッシュ（呉の帰り、見つけたフランダースの犬（仮））を忘れてた！確か恋さんの家で、すぐ帰ってくると思ってたから・

・・・・・・恋さんの家だ！
そして家に着いた。
「ごめんよ、パトラッシュ！！！！」
家の中に、寝ているパトラッシュ（仮）が寝ていた。
「良かった・・・・・・」
「・・・・・・・どうしたの凛花？」
「急に走り出して何なのですか！？」
追いついてきた恋さんと音々音が、聞いてきた。
「ちょっとね・・・・・旅の途中で犬を拾ってきたんだ。その犬をほったらかしで・・・・・」
私が指さした犬を見て、音々音はいきなり、
「張々ーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！」
え？張々って？フランダースの犬（仮）じゃないの？え？本当に・・・・・・・・・・・・・
音々音は、泣きじゃくり、フランダースの犬（仮）に抱きついていた。
え？私の興奮は期待は？・・・・・・・・・・・・・

「はい！山賊に村を襲われた時に、はぐれてもう・・・・・・・死んじゃったんじゃないかって思っていた張々っていう、親友です・・・・」

そうなんだ・・・・・・・・

「良かったね」

ん？何だろうこの音？
周りで急いでこっちに走ってきてる音がした。

「どうしたんや！？」

あの関西弁の少女だった。

「あの？どうしてここに？」

「なんや、シャレにならん泣き声が聞こえたもんでな・・・・・・」

「いえ、ちょっとあの～・・・・・・・・」

「・・・・・・・・心配ない」

「ん？なんや恋とねねやん・・・・・・それと昨日、恋と戦った・・・・・」

「あ～自己紹介してませんでしたね。私は周倉です」

「うちは、張遼、字は文遠。真名は霞や。」

「いいんですか?真名まで・・・・・」

「ええねん、ええねん。あんた、恋が真名預けてるほどやし。」

「じゃあ私も。真名は凛花です」

「ねねが泣いてるんか?」

「はい。・・・・・私が連れてきた犬がはぐれた親友だって言ってたので・・・・・」

「そうか・・・・・・じゃあうちが出て行ってもしゃあないな・・・・・任せれるか?」

「・・・・・・・・大丈夫」

「そうか・・・・・ほな、うちは戻っとくわ」

霞さんはいってしまって、私と恋さんは泣きやむまでずっと待っていた。

「もういっちゃうんですか?」

泣きやんだあと、私はいってくる、と音々音に伝えた。

「うん・・・・・私、今日の夕方出るつもりなんだ。」

「もうすぐじゃないですか・・・・・」

「うん・・・・・・私、もっとこの世界を歩いて回りたいから・・・・」

「なら、1か月ぐらいで戻ってきてくださいね・・・」

「うん・・・・・・」

「・・・・・・・約束」

「わかったよ。またね」

「またねです」

「・・・・・・・またね」

洛陽の城門を出て思う、もっといたらよかったんじゃないか?と。
でも私はもっとたくさんの人を助けたい・・・・・・・・・・だから・・・・・・・

湿っぽいはなしはなしにして!次、どこ行こうか・・・・・・・恋姫無双の記憶なんて結構すっ飛んじゃってるしなぁ・・・・・・・・・・・う～んじゃあこの村に向かおうかな・・・・結構近いしね。
じゃあいくか!

周倉がしるしをつけた村・・・・・・それが後の楼桑村であることは周倉は知らなかった・・・・・・

陳宮の親友（後書き）

どんどん董卓軍の人たちのしゃべり方がわからなくなってきた・・・・・・・

もっとがんばるよ！

ユニーク２万突破！！ありがとうございます！！！

見ていただいてる方々に感謝を！！本当にありがとうございます！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0584m/

転生！　恋姫

2010年10月9日15時56分発行